

## 特集 「コモンモラリティとしての最高道徳」

### 人類社会はコモンモラリティを求めている

—モラルサイエンス国際会議（平成一四年八月五日〜九日）を終えて—

道徳科学研究センター長

北川 治 男

#### 一 「モラルサイエンス国際会議」のねらい

二十一世紀を迎えた現在、人類社会のグローバル化が進む中で、民族・宗教間の紛争は跡を絶たず、地球環境問題は大きな脅威となっています。バイオテクノロジーやインターネットに代表される科学技術の進歩は、多大な恩恵とともに、新しく困難な倫理道徳上の問題をもたらしています。

今こそ、人類が共有できる新しい倫理道徳（コモンモラリティ）が切実に求められています。このような認識に立ち、モラロジー研究所は「グローバル時代のコモンモラリティの探求」と題して「モラルサイエンス国際会議」を開催しました。

今回の国際会議では、比較文明学、宗教学、生命医学倫理、情報科学倫理、ビジネスエシックスなど、国の内外の専門家から、人類共有のコモンモラリティとは何か、それを創造し実践していくためには何をなすべきかについて、多くの重要な提言がなされました。あわせてモラロジーの最高道徳も、コモンモラリティの有力な候補として議論の俎上に載せ、モラロジーの創立者・廣池千九郎先生の思想と実践および最高道徳の価値観を紹介しました。専門分野や立場を異にする人々がコモンモラリティのあり方を探求し、お互いの研究と実践を踏まえて切磋琢磨する共通の土俵を、モラルサイエンスの一つとして体系化されたモラロジーの立場から提供するというのが、今回の国際会議の主なねらいでした。

## 二 コモンモラリティへの二つのアプローチ

会議の冒頭、永安幸正教授（道徳科学センター研究主幹）が、今回の国際会議の趣旨は、①異文化を貫く共通性、②異なる生活領域の間の共通性、③異なる歴史段階の間の共通性、そして④倫理道徳の理解と方法における共通性を探求することを通して、人類共有のコモンモラリティを探求するところにあると述べ、会議の基本的な方向づけを行いました。それを受けて行われた発表や討論

では、実に多種多様で内容豊かな提言がなされました。それらに一貫して流れていたのは、不透明な人類社会の未来に対する危機感であり、今こそ共有可能なコモンモラリティの探求が不可欠であるという使命感と連帯感でした。

そしてコモンモラリティとは何なのかという問いに対して、おおよそ次の二つのアプローチからの提言がなされたように思います。一つは、特定の宗教や文明の違いを超えて人類が共有できる高次の精神的価値の追求をめざすものであり、もう一つは、現代社会における人類的課題をしっかりと見据え解決していく過程で、さまざまな価値観や道徳理想も参照し、広く一般の個人や集団が共有できる行動規範や道徳性を追求しようとするものです。

## 三 異なる文明に通底する価値を求めて

第一のアプローチは、伊東俊太郎教授（麗澤大学比較文明文化研究センター長）の比較文明学や、間瀬啓允教授（東北公益文科大学）の宗教多元主義に代表されるものでした。伊東俊太郎教授は、ギリシャ哲学、仏教、儒教、キリスト教などの各文明圏を、いずれも「究極的霊性」(the Ultimate Spirituality)ともいふべき共通の目標に向かって、さまざまな登山口から登攀する道にたとえ、諸宗教が排斥し合うのではなく、人類の道徳的完成に向かって進む僚友として相互に関心を持ち学び合う「地球的意識」が必要だと主張しました。間瀬啓允教授は、多様な宗教の背後には一つの神的存在が存在し、具体的な宗教はその多様な表れであるとする宗教多元主義の立場から、諸宗教が

敵対し合うのではなく、ともに自我中心の生き方から神的実在中心の生き方へと変革を遂げていく宗教寛容の必要性を訴えました。

服部英二教授（道徳科学研究センター）は、文化の多様性こそ人類生存の鍵であり、異なる文明に通底する価値を見出すことの必要性を強調し、川窪啓資教授（麗澤大学）は、A・J・トインビーの高等宗教と比較しながら最高道徳の特色とコモンモラルティとしての可能性を示唆しました。そのほか、ヒンズー教や仏教、儒教からの提言も、第一のアプローチに属するものといえるでしょう。

#### 四 コモンモラルティへの合意形成

他方、第二のアプローチの代表は、トム・L・ビーチャム教授（アメリカ・ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所）やジャン・ポベロ教授（フランス国立高等研究院長）です。ビーチャム教授によれば、コモンモラルティは「道徳を真剣に考え実行する人々が共有する規範」であり、たとえば嘘をつかない、盗まない、罪のない人を傷つけない殺さない、約束を守る、他人の権利を尊重するなど  
の行動基準であり義務です。また正直、誠実などの品性特性であり美徳です。これに対して、聖人や英雄などが提示した道徳理想、また特定のコミュニティに固有な慣習的因襲的道德はもちろん、専門職倫理もまた特殊道徳であって、それらは具体的な政策決定や問題解決の過程に適用され、広く一般に合意され正当化されてはじめて、コモンモラルティの資格を獲得しようと述べました。

ポベロ教授は、フランスの宗教に依拠しない世俗的道德は人間の尊厳と連帯という普遍的価値を実現しようとする点で、コモンモラルティの構築に重要な示唆を与えるものであると述べました。ジョセフ・M・キツザ教授（アメリカ・テネシー大学チャタヌガ校）は、サイバースペース（電脳空間）において、コモンモラルティを規定し守る努力の必要性を訴えました。またケア理論の立場から、身体を持った生身の人間相互のかかわりの中に倫理道徳のあり方を捉えようとする水野治太郎教授（麗澤大学）、相互依存・相互扶助のネットワークにおける人間の生き方に焦点を当てた岩佐信道教授（道徳科学研究センター）、および礼儀作法など伝統的道德の実践を重視し、同時にそれを乗り越える道徳の必要性を訴えた洪顕吉教授（韓国・嘉泉吉大学）も、このアプローチに位置づけることができるでしょう。

#### 五 未来社会のコモンモラルティの創造を求めて

最終日のパネルディスカッションでは、ビーチャム教授がコメンテーターとして全体を総括し、未来に向かってコモンモラルティを創造していくためには、①既存のコモンモラルティ（existing common morality）を手がかりとして出発し、②共有化された道徳の増大を熟望（aspirations for increased morality in common）し、③共有化された道徳理想（moral ideals held in common）を構築し、そして④さまざまな道徳原理を道徳理論へと収斂（converging principles in moral theory）させていくことが、私たちの課題であると訴えました。この四つのプロセスの周期的な積み重ねによって、さらに新たなコモンモラルティの創造が可能となるのです。このプロセスの中で、

上記の第一と第二のアプローチは、相互に対話を積み重ねながら、未来社会のコモンモラルティの創造に重要な役割を果たしていくことになるでしょう。

この国際会議を通じて、私たちは今後、モラロジーの立場から現実の困難な倫理道徳問題としっかり対面し、最高道徳の価値観を適用しながら具体的な問題解決の処方箋を絶えず提示していく必要があることを痛感しました。またその過程で最高道徳論の新たな意味の発見と再構築を不断に続けていくことが、人類共有のコモンモラルティに資する道であることを確認することができました。

〔まなびとびあ〕第六九号〔平成一四年九月一日発行〕より、英文加筆〕